

七部集大鏡

炭俵六

中村俊定文庫

文庫 18

999

7



炭
俵





炭俵

信濃何九撰釋

毛の窓とひらき心の泉を汲

一書ふ云僕相めらう白ふ朝閑尾窓夕汲心泉
一書ふ云莊子曰原憲居魯環堵之室茨以
生草蓬戸不完棗以爲樞而甕補室褐以
爲塞

十ああり七の文字の野風

愚考野風と云は借をを卑下していつふ
初より朝野と云はくまそく胡多朝庭の
義野を郊外の義なり

宋人の不龜ららぬといふ事

愚考火桶ふげ一炭をたこ寸ま子の
のこちのひといふ事菱家の句ふ夜を
龜多不龜夫此古事也莊子曰宋人有
罾不龜者之集者以候時統る事客
字之請賞其方百金聚族而謀曰我世
爲海時統不龜數金今一物而鬻投百金請
与之客爲之以從吳王越有難吳王使
之將冬与越人一水戰大敗越人裂地
封之越不龜于一也或以封或不龜於
海時統則用之矣也

さしくまうはる格の同音のめ

一書ふ如修の初りのめありのめありのめ
もうはりのめあると云く
愚考伝列の

疏黄を鶯の目とけいて上あし守出羽の
旅黄を鶯の目とけいて上あし守出羽の
吹しりて大うはりのめきしきるのをなめ
てうくひんとるや

有厚の法をたや

成美曰宋僧洪亮軌石門文字録云宋迪
紙八境絶妙人謂之无聲白演上人
戲余曰道人能依有声画乎 愚考

王维曰詩有厚画畫无声詩又曰王摩詰
の画多画中よるもの王六去り詩ハ詩
中よ画にん

詩の正美よいつの九つの品

成美曰毛詩正美曰各篇の例を無定
準多不区カワ終一或偏拳両字或

全取一句偏拳則或上或下全取則或
盡或餘亦有終甚篇首撮章中之一
言或後都遺見又假外理以定終

たのまてやまの巻くの歎ひふ
まあねと

一書よ白和秋の五段篇序歌曲伝

例の口よ任ちるよあは編小

よりのありのたるる

愚考竊よより取たりとを例の名體は用
教の教号五章の教より待秋の五段を
るまていそくよまよとのいひるる
次よ叙す

くぬきで炭のつら款を拵編

成美曰撰教寺辭醒集よちきりた

やちりめ録心のり〜つりなとるりめる
ねやのねや、

独あらし〜をこわさずさりて略
歌号おのけ〜ひ〜けり

愚考の独を曾てそを連を歌号と
すら別歌るり歌号歌編よ合せて見え
梅うまよの法と目のおる山越えよ

古注よゆきお歌るのよ〜白中よまの
まよるるよとよまよ〜きり〜き
ホを〜歌略の法〜やりよ〜き
菴のゆよ暫時電載花幾知葉沉波
又林本靖の梅のゆよ横斜疎歌水依
涼暗よ浮動月芙蓉昏のゆきよを歌を
い〜〜で吟あをよとあ〜〜を歌略

の法るり 愚考為歌傍歌といよ〜歌
略の法〜め何そや歌略互歌とよ祖
翁のりよ郭公正月を梅のよなさり
そよ不〜きよの白るりる意を郭公を
る〜ゆめそ正月梅のあ〜る時よまの
いよ卯花う〜ふるりぬを〜あ
〜や〜る〜不〜き〜す〜ゆき〜る
まハ梅よ卯花正月よ日月と皆そのの時
の系物をゆ〜け合と〜り時をよまの
れ歌を略〜梅よ卯花を歌よ略〜る
るり余考の歌よて余考を歌といよ〜
や何のよ〜空なよ〜〜ぬるりのゆり
歌略といよ法をる〜歌略互歌とよ
〜〜〜歌を略〜互よ卯の法

るりの法不奪胎の法換骨の法流るると
する人ありいく心めてうらまのりるむ
是より胎を奪くして骨を換るゆ一不奪胎
換骨といふ摸字意態とを写し摸して
態を奪るの法あり錯綜轉倒ともうら
みるむして轉倒すといふの法あり

一書よ西政のるよ通く此袋の依ぬ海翁の
曰ゆふらちよりかまよきまのちうとを忠
うらまといきまは河海の細流を撰るは
といをむらる人合らるといふ通むより上ま
いと通むといふ御借の金言るなり 成美曰
東宮紀亨孫四年正月九日今曉室町辰
姫君延生也此袋大鼓を庫貯く殊云

愚考後ま名目云母を備ふるそのらるるの版
中ふその子畫ま出の時備の中ふりのく在ぬ
ふ備ま六めてしきりよふまてしきりて中備ま
山傍圖紙云俗稱人母袋と云蓋胎胎之義を
取矣又曰豈不奇きを袋と云摸ふ奇きを包と云
抄層不奇科下地 変て なる
此ゆをおまふ人合 一ぬまき
一書ふ終りく君合をぬくといひるるるを合
身まといひる甚奇と 愚考四る端まの用
意よてまうけするま端の側まをうさうりて備る
るりのその主人を終りて藤子引ま入る流まて
血毒のま堂目紙ありむむ所の君合を露
露りてしるぬら終るるを目うけてぬま
放しる備く 君合のるま 秘術者林

漆を仕とりのよりのより始るとある

そのやうく小書物のいさぎを遊具

愚考を細の例あるもの本所、時々の
五月のるる山家の如く今秋の教意おこ
此心好るき人々を何や〜とも思ふから改不
中越後の山家まで今秋あきけといひ親を
片りよる書入人何連ハい入人も御り〜
杞りよるその招えを思ふさるる山家

初午小女席の親子あるまゝにて

成美曰親子とて親屬のるる〜て親と子
といふるよあやう何中必の俚云云

愚考きまハ親子とよるハ親子と平ふよ之
急好ハ遊戯なり親さ〜

成美曰双扇中巻中子寂閑〜ハ余松丸を具

しておとる〜
産を〜して〜とて力あ〜と
もの〜して遊や〜のものを〜
き 愚考急好ハト初越後〜
後途世和歌口玉王の一人る〜
見山椿田井庄小幸寸心恒の産る色
ハ恒の心る〜と名置子の教るなり

あきや昔よ書 色

一書小色〜書昔るり 廣樂〜と小珠
の子出の卵る〜書付の〜
何の〜書ハ色を〜て子小何〜
よ白き虫の子何書ハ色を〜といふ
又土象家の料理よ書〜といふものなり
拾へ貝の身り〜の供を〜て書る

とらうてくもむるり本花者の虫啄むり
せしる名るり
歳美曰和漢三才集會
小曰揚州揚州小經名雀飲又毛吹草小
雀飲を以て附るり腹小食入るる雀の
めくさるるをせりり

細しと能る故の宵の月

一書小源氏花のころる集小卯月の能る故
おまとのあらの花中略月をきしおまの
花のいりさるるれもるる不と集する小
六月七日あらさるるをりりるり
あてりり通の能る故の月とを七月をきす
とあるり

泥練をもちきし漸きよのえん心

野人曰下地を山うるりしき漆を上を

泥よして仕上るるはあよるり一名泥練と云
るりししきもあるり

愚考を能くあるり能くあるりの葉あるり能
するりやるるはあるり能くあるりの葉
の葉あるり刻よしてしとまねるり能くあるり
細あるりのいれの能るり雪のうり

太印曰ワナキを雪守よ用ゆの昔の葉よ
て製す丸のむらきことまのいよん
くさるりしと海内の若お能るりし

愚考を能くあるり能くあるりの葉あるり能
物を能くあるり能くあるりの葉あるり能
保村よるりしめて能くあるり能くあるり能
くさるり能くあるり能くあるりの葉あるり能
くさるり能くあるり能くあるりの葉あるり能

くはくし 形るなり

金佛の細き四足をさすりらむ
此のいよいの小き みるなり

愚考竹灯録曰才一祖述多世考入滅涅槃迦系至双林相問悲哀踰泣傳於金檀内現双足又曰宝物集小大匠匡衡昔切利天之安否九十日刻赤梅檀而摸寫容今跋院河之滅後二子奉治紫磨金而礼兩足一はははを次の符ふいよいの小き踏よりを涅槃の傍にえまらふ

空豆の花咲ふなり 妻の縁

愚考大和本字曰通年矣ふよりなるゆへ
小西ふよりなる 産多とゆふ共実空ふ

向ゆふ空豆とゆふの八九月をぬを扱ふ
日陰或る下或る田るをばはるりてま
よく丹のちと云く

子多裸父をてて連て早苗舟

母のいよいのま 白ふさく

愚考杜子美南系久客耕南畝北足傷
神斗北窓一帯引老妻乘小艇晴看稚子
浴漢白俱飛渡城允相逐 玉帶芙蓉
本自双茗飲蔗漿携所存 管弦无耐
玉為缸又古歌 小舟の みる女歌柳の
下すみみ 藤多てて連て女をさすりて
香の服とま 侍歌のまをえまらりて
を蓮よりて渡ふ歌を多歌よりして優
よいてる 名佛塔の良林なる蓮も女

此等の繁きよふにすく水

送るにぬのうらの詞を歩妙と

一峰曰ま由りゆ水の紙よ古よ灰汁より

水よ濁りりるく音厚よ信信をふらより

うらの詞ををばよよまはうらの詞より

音曲系よて厚の表裏をばよよまは

まらよよまは表の裏をばよよまは

としよよまはハ律、あまよよまは

まのまよよまは律、あまよよまは

ふま律はよよまは五畿内をよよまは

あま水の表の裏をばよよまは

すうりてあまよよまはのあま

とよよまは表とよよまは十二律とい

律はよよまは法のあまよよまは

詞とよよまはあまよよまは

て旅よりよよまは陰陽をよよまは

まよよまは旅の情よよまは

ゆるよよまは旅のあまよよまは

らあまよよまはあまよよまは

舞舞のあまよよまは

成美曰互轉クルへきまをよよまは

ゆい又まはハよよまは

あまのあまよよまは

切蟻の暗倒

愚考地中一すよよまは

うまよよまは暗切をよよまは

あまよよまは北越よよまは

瘧 日をたすてつらうせしむ 瘧心
 考てすけつらうつらうの年つとき
 愚考乃將お急曰瘧鬼日不能レ病巨人故不
 壮士瘧を不病と晋人曰君子を瘧を不
 病蜀人瘧瘧を以て奴婢の病と守字
 少其いして次入下註の附所の志瘧を且より
 起りの病るなり

此まな名の名をいやくも半 鳥り
 愚考乃連入を々専主なり夫をい軍一げふ
 よい鳥りと附しむ後の子なり 樂天後の時
 よ云後花紫紫草 花もふま 技煉後
 謂ぬ教を而る害有餘 中略 又如妖婦人
 網繆盡を夫奇 邪壞 人室夫惑 不能
 除去の時的心を先て二白の佛とす

考の月横小負ある 古 注

をいきの長かあるふあつてい
 此はそつと益もるつら降古也

愚考乃流路まはしていな牛ととりふる大も非
 るりまらつていといし約牛もよまらつて
 大ききもの小對しつてまはすの代り
 けりつとまらつてい牛又まらつてい
 小成く向人の娘もあつてい小成く或を梨
 樹ゆふよまらつてい牛も大之胡蹄とハ
 牛も人 まらつてい牛も男牛之只一も小人の云
 小成あり半と心なまらつてい小成く 全体
 附りつとまらつてい牛も小負ある
 柱を横し負るそ自痛のりつと次の依もす
 いき畑々両方入らつてい牛も小負ありて

愚考のくくくむろくくをこめやたのあり田
のありくくく朝中をくくくをくくくふ戸板
をくくく根とくくく漢美をくくく用ひ也
て南産の湯とのくく

野志比丘尼の御の巻をよ
愚考の東海を巻川をよ比丘尼のありくくく
御くくく入て旅人の袖をくくく伊勢海を白福
くくく糸白漢迎をよくくく伊勢ありくく

月夜ふくくく御珠の御くくく
弦打 巻 海 雲 くらふ 権

一書小弦打巻を風の巻あり暴風の物あり
ありてくく弦打巻をくくくくくあり
愚考のくくく御珠を日本よくく余あり
引くくく紀州の加田あり御珠打山の御を

弦打巻くくく弦打山を瀬波と御の浦の山
ありその山をくくく加田あり御珠の浦くくく
吹流くくくく御珠の浦くくくくく海雲
を完上とくく御珠と弦打と御 雲と御
雲のくくく御珠をくくくくくくく海を水
雲の御珠をくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくく

大節の巻をくくくくくくくくくくくく
休々々の休々々の休あり番舞の御よ二よ
休々々の休ありくくく

小巻の巻の巻 志の あり
一書よ小巻をくくくくくくくくくくくく
よくくくくくくくくくくくく

故王寺の上よくくくく二巻

かゝるをさるるのいさゝかありりきり

一書は平相國の妓王妓女といひのいふ拍子屋に
成て余亦あきし、あこ又小倉山二宮院を法然
上人供奉の、子なるあり執事、至立せま
介ふ此院、其もあひまうりよして二宮院と云
思ふ、二宮院を小倉山の持と二宮院といふ、秋
沙院をさす、執事、銘を玉を二宮とまうす、
いさゝかさる、又同書ふ、さむく、管の、さ
樂あり、弦、管、さむく、らり、さの、箏、さす、の、音を
り、み、只、あ、針、の、樂、さ、る、ま、い、さ、る、り、
一書、よ、さ、む
く、く、ち、天、地、を、隔、の、り、む、く、く、さ、り、て、さ、の、さ、
り、さ、い、ら、く、く、さ、る、を、隔、と、い、ふ、り、こ、と、い、
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、の、表、の、游、あ、り、云、
一書、よ、卷、懐、食、後、曰、ト、流、華、入、心、妙、く、は、盛、せ、

瓶、茶、も、り、さ、る、水、タ、キ、と、い、ひ、一、流、茶、さ、り、と
り、清、養、を、抜、草、の、る、さ、り、と、云、
園、を、流、り、て、茶、院、よ、り、さ、る、り、
一書、よ、さ、る、に、り、の、さ、り、竹、を、さ、り、さ、り、の、り、
園、林、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、の、さ、り、さ、り、さ、り、
の、さ、り、を、細、よ、て、さ、り、
思、ふ、ま、あ、り、り、と、い、
園、の、り、さ、り、則、園、を、流、り、て、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、
と、い、つ、り、の、さ、り、さ、り、入、瓶、茶、の、さ、り、
一、の、さ、り、よ、り、の、己、の、目、を、さ、り、
入、さ、り、人、よ、り、味、さ、り、め、を、さ、り、
一、味、出、土、曰、味、さ、り、を、焼、ふ、り、さ、り、己、の、目、を
よ、り、と、さ、り、故、ふ、此、院、と、
ん、や、し、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、
思、ふ、り、東、土、焼、け、り、松、焼、の、新、子、初、と、い、ひ、云、ハ

漢ノ除夜又々々夕ノ爆竹を鳴す
我後傳々として十五日の節と又書き
燒るりの事述ハ東宮の義をえつて
よつことむととらる。列しつこと
書云故子日御史有三院三院皆
堂又事又後集日吐堂を大勢の
又不やしく大哉くかつしと
火をこしりし疑と不やし
を隠し形と不火穂平鷹の
司の空のこと

節の内引越してある 櫻 原

五味堂日或傳正の月元よ
群はく人の事あるをい
大和母の櫻原より引越して

をさつりとるりの 愚考櫻原を七条通大炊
川の西より丹波やありき述ハ氷菓の
て流れるる一

何年書 控 志 抄の末

愚考了すよふさるる何年書
テをその控といしより九年
よつことりてつくりし
の巻よ成の巻をいふ
白も何年書其控を略して
氣のつりり 節日志方の
愚考了 款氏家訓道書日
名罪天奪之算 此をいふ
月終痛哭すりる海を
文よ日生をを新い 詠を
て曉日

愚考了 款氏家訓道書日
名罪天奪之算 此をいふ
月終痛哭すりる海を
文よ日生をを新い 詠を
て曉日

新秋新のよ悲しむる鬼神の悪所云々
其の初の日をたふしといふる事
あるは心あけしよするくよきこりこ
けの若目なるを精を著るて氣うつらと云
うむし一果つらハカ
成美曰契仲云云云云云云云云云云
云屈のう子の音を和使うるささハハ云
愚考一本うむらと書る非るりうみうむ
しうむらり路同く一果るりさりの物一こ
むしの新并こハカるる年中古交必雨を云
あこハカ十二日新よ壬の子よ入亥の日
うららの戊辰年世ハカるのり日十二日
何日のる日を云てハカるといふ

蓬萊よすもや伴物の神を云

古注曰新又云古注の依り
とゆらる元日の式の今振るる
ゆらして依りもやと道祖神の
をささるり一果つらハカるる
のあつらよ海に字あふらるる
さうししきあつらを思ひ出
の初よつらり神の一字を吟
うららるるを蓬萊よ對して結
慈音新よあつら一果つらハカ
はまて依りもや一果つらハカ
みらのかくのさハハ関然ハ箱
の海を

海味堂曰仙臺金瓶山の標より
正月十五日

天子一三尺の法志を真すのしと云く 杖事曰
後孫送集よ何は了治の各古昔の関す
何のものをいりてり善の執て是はくらむ

善や孫く丹波の鹿の海のとて
一書よ平家抽後よきやうのあま鹿をよよ
の成をとこのよひのそらよよ愛よるひの
子の深きよふ叶むとてらんすの鹿を丹波
一執えよるよにきくあり此の電物ありとて
丹波の麻をらんりるのいそよ一執えひ

いそよきよ善を者のの うきよるる
経味堂曰このきよるる 健袴とて善袴の敷
りのと云く 成美曰伝そ紙よ田舎装束の
うよそ袴の小袴衣を拵て肩よのけりし
愚考の袴袴よのよよ一者の字の解をぬ

袴よとけぬるりの者よ奴隷一肩の比喩と
更比を被を身て此よ状す森斯縁衣の敷と
来子曰引物為説者こととよよいやくしよ
ふ比よるるるの表衣よもの物の袴の袴を
引うけしよとていよよとて善袴を
鞠のよるるの袴袴のよるるは次の花よん
よ袴の装束の有り侍よ袴の服あり
實送付物記曰侍衣老母の胎内よ宿し
血中よ位五位を授て出現初て佛法終
けよ執く父母の恩きを報し 元生を
利益せむとすゆふ血相を表して系
色よ染りし相あり侍者の比喩
のよし善袴ゆを者の笑よよとて
よの善の家や者よるるよの業業畑

ふ花はえ敷るる花はをきける十郎奴隸の
比喩ありとある

噴は弁や木音の自れの花

思ふも木音も枝の多きいふことあり造り

あせし三方ありとある

然いさ建門統城の氷柱

いさ建門のいさをいさ建門といふ事あり

思ふもいさなりをいさ建門といふ事あり

イトム イサエ イケサ 等あり 活法曰性之勇

急也

新田新が葉をいさ建門といふ事あり

一書ふまきの花のいさ建門といふ事あり

初の花ふ花をいさ建門といふ事あり

梅一本は花をいさ建門といふ事あり

意味堂曰は花をいさ建門といふ事あり
さそよのいさ建門の花をいさ建門といふ事あり
依り木をいさ建門といふ事あり
諸木ふまきの花をいさ建門といふ事あり
五梅をいさ建門といふ事あり

一書ふまきの花をいさ建門といふ事あり
いさ建門の花をいさ建門といふ事あり
めくいさ建門の花をいさ建門といふ事あり
いさ建門の花をいさ建門といふ事あり
いさ建門の花をいさ建門といふ事あり

とある

一書ふ七種の花をいさ建門といふ事あり

とある

唐土のいさ建門といふ事あり

大原や坪の出てありおぼろ月

愚考後拾遺集よふとて會てや月おぼろ
やうい大原やおぼろの儀ありき名はくらの
大原を北山より

愚考よ葉を一つむさうの文

愚考道枝集よむさうの文とてあやしき
りよふあやしきと云く

愚考の一考よ葉を入よきり

愚考杜子美便葉考決大丁寧

五人技持てたて志くし柳うま

愚考夫木集山里をさきくりりそめめ
垣持持する人もあるきく家ありき又続
篋の白入笑くの花や飯米五十石思ふ
又芒燈を技持する人もあるきく
と述懐し柳あり五人技持位の人
の意を

ようくいんりり縁紙よまのいんりり
う又様を極て五十石をの意陰よ松
枇杷を極て極ありき極の花し
殊よ此柳を五針米の五をゆり
柳のを合も心ありき五をのり
て五十石の様も又芒のを
の法ありき

花書や白きりらを突合せ

弁地曰白氏文集二月五日花如雪五十二人
頭似霜

新女一の湯を斤勝や産の花

愚考正宗よ曰新花夕月世家と云く
あやしき夕飯のあやしき古人心を
あやしき

見えぬ

柳の装束ゆすり垂すや花の中
愚考り柳の装束を前より備へて此
げとゆすりたる古流曰折花正夜裳とて此ハ
必をくらむとの判きこりたりし

流母を花と珠敷くは逆とくら

愚考り枕字紙と云ふは建ハ懸る老女志の
ハ海運と花をへて是建ハもの母の心
此花装束の巻と摺る母をすしめて花
のつけいば建はの敷の侍り也

常をよふ川のありき 志不干が

愚考り古今集念食つて吉備の中 山の常ふ
ちの細谷川の音のやうなり

春るや障の巢つて入る根のあり

一書みはくしと書のみありのやと
志のよふはくしと朝の玉あり 愚考り

しめのみ春ると五月ると云ふは
ものるまははそのげらめえゆか
くらへと云いありとありの
るを井のたう林のきしを
自然よそのすしとありの
を道あちるその心ゆも
見えたりはまのるのま
も好ゆくと云ふは
ちかて建ハとて折花と云ふ
る

柳花やくらき柳の及ふ

一書りにも場の昂無と云ふれり

よ柳園花明とりのり出せりあやうのまを様
探のりをくくりにる盲人のあはれとく
さうりあてり熱向の世をまをむいぬる運と及
あしとりのいふふとりのり杜律曰隔戸楊
柳弱嬌く恰似十五兒女腰のり蜀山人の
依張しよもま柳をめとるのり眉を腸もあり
てまののりをくくりにる運といとらけや
さうりあてりい例るさうりまはくぬのむ
こゝろねるさうり

悼の歌をやうくあやうめらう船
愚考の悼の歌をほ私歌あやうめらうを種
おろりあてり

整家祇記よ蓮ありあやう
芝山曰家子紙よ曰新田意の親王勝回田の池

よあそいては心よ感徳あやうのあやうの還り
あひて堪は婦人よあやうて曰今日坊のりて
傍る田の池をまのりよ水溝くといて蓮灼く
まのりあやうの恰何の恰何勝りあやうのり
中ををあつて婦人実ととらけあやうのまのり
歌を後て曰勝回田の池を我知の蓮あ
しあやうのりあ君の整あやうのりあ
あやうあやう人皆彼親王よ整あやうのり
をそむむるあやうのり故從教法師のまのり
親王をまのりてのりあの大整あやうのり
彼歌の心をまのりあのり整あやうのり
あやう傍る田の池よあやうのり蓮あり
あやうとあやうのりあやうのり人皆その
感歎すのりあやうのり

夢や竹の子藪よ心を移く

一書よ志を病蚕のつりを白氏文集の例よるりよと云く

かきす一二の橋の夜明が

一書よ江戸本一ツ目二ツ目の橋を一二の橋と伝ふるり則經尺を一ツ目の物某所指するりと云く 一説よ一二の橋を

伝ふるりそのふりその伝るりと云く

愚考は伝よ一の橋二の橋三の橋とし并続けつてさきハ一橋のありのるり伝ふり実小掛噴の節々一三の橋ありてその目も及ん絶橋の系色あるむりの伝を伝ふり其の系色あるハ伝の方統らむりやい伝ふり一橋一の伝の伝るり伝ふり一書志を伝ふ

さきめよ

ホクこれて葉はみまきくや野

古注よ曰人志を伝ふ大内山の山を本よと云くこの并月を伝ふるり此れ本よと云く

愚考その新改の歌を五ま字の并よ一

てさきよよ本よと云く一八九号を伝ふ

やハ愚考時を神外能の伝ふりこれ後

撰集よ本よと云くてさき伝ふり下のか

とさきよ本よと云く一ハ枝一伝のさき

又夫わりのしりよるりその并志を伝ふ

やその傳る本よと云く伝てさきその并志を

をそのの伝のまを葉伝ふりの人の本よと云

てはよと云く一ハやあむり

柳寺よ麦穂い屋一や伝り

成美曰吾後園原見歌立政寺也於十
五石信小柳寺と稱す園ヶ系浄跡の時
此寺ありて 神君小村を献つ是よりや大垣
ヶ系入一と稱す一ありと云く又の流小
百目柳とあり

又ありくは上りる一 糎五把

一書小母後より定子の旁一系らきあり
小立す針の弁懸りて針を弁杖の形子既
色并るる一して山橋日ヶけ山すけありて
ら一くくつりては又あり一 成美曰糎五把
おありすりては又ありき山ありし女住
辰宮るる一と云く一ひをさすらりそすくきり
既ありしありきと云く一あり字ありる一と云く
よありのち晴久一とありと云く一ありを阿そ

きく一書小母のたくと後述やばつなりと云く
既ありしありきと云く一あり字ありては又あり
よあり 愚考貞徳も嘴い後述より集外三十
六歌仙のりる事述はとも云く

駿河海也 ともなる橋や葉の白也

一書小母後より定子の旁一系らきあり
一書小母後より定子の旁一系らきあり

橋や定家批 此ありるところ

成美曰服息のちとくありて小せきこれ
右一ありと云く一と自由と云く

のむくや磯葉す一書小母の
愚考神徳帝小いつる糎斗むくは是中の

何と云ふらげり

子乙女ふくして産くる葉飯の形

愚考天照太神慈人の書りし所の五穀の種
は天狭田長田入植のひしより田植の事
を女の業ふありのよし早乙女とよみ

と山や人をすまふ女を生くる事

愚考山の子本宿のを岷山とよみ本宿の
を岷とよみ

竹の子や思の遠くまのうはらき

成美曰源氏らの語撰留はるのたのしむる
あて心とてあつらふを治とよみあつらひの
こととよみ

新雲を産んで居てえりやまき

愚考柏玉集ふらるるやうにむすの宿を

こすまはるる産りし軒のたのしむる

明月や不二見ゆりしすりの所

愚考明月と書し一書の趣ふある事
不二富士不三富士の富士とよみ
士考三上山等の名は富士の富士とよみ
師嶽・親善嶽・地蔵嶽・浅間嶽・大月嶽・不動嶽
阿蘇嶽・新嶽・新嶽とよみ

新くかやるる産りし門の垣

愚考近思録曰聖人の事不三事不三事故
日閉固えて帰去来の辞ふ門新後出固
新固の辞ふゆはる又世を夫固固後等
を例かきし

てしりなると新新をりし新

一書ふらるるといふ五文字の書は得こと

まゝ思ふ考つてこのるの書體よあつては毎
一く入くするを蔓字といふは世に於て
手をつらうするの字といふは一の字ハ
助字なるの故よ我此大鏡よよよ書よよの
字をて書てこの字をよよ用けを別よよ
書の法則ありてはやありするや一すて
出の字よよ字よよ修字よよよよの字
下のほの字よよの字よよ上よよ下の
法ありするの心をたててよよをすよよ

鹿のよよ字や 硯のよよ字
一書よ硯の海の麻のよよ字よよ
恒歎といふ

近江路やすくはよよ鹿の長
匠村集よよ白山の行よよ

よよすくはよよ字よよ通音よよ
百多よよ筑波根の寄向よよ尾山と
よよ源徳秘変よよ次末よよのよよ
硯^カ涯^カ涯^カよよすくはよよ字よよのよよ
よよ字よよ字よよ字よよ字よよ字よよ
よよ字よよ字よよ字よよ字よよ字よよ
よよ字よよ字よよ字よよ字よよ字よよ
よよ字よよ字よよ字よよ字よよ字よよ

よよ城のよよ字よよ字よよ字
一書よよ字よよ字よよ字よよ字
朝臣のよよ字よよ字よよ字
女中のよよ字よよ字よよ字

草うへや鼻の先なるの歌なり

公石曰草花ののり上の子午ののりの
もて目の前より何れをさる花の
をさるりもて花よもさるるなり
そく先つしと心をさるるののり

菊はさけ菊のあり菊ののり

愚考のりりしをさるのり
花をたかくたつみりり
のり

菊菊の色よのり

一本の菊とてさるのり
菊ののり
のり

柳ののり本を子休のより

愚考のり國陽雜俎曰柳入七絶あり

多壽ニ多花三流多不似景曰本
中不生虫五雲多可也六秋實七
落葉甚肥滑堪以書紙云云

紙の故り多鄭度とてし去極矣
書をぬむ柳の葉をさるり
の代りしとす

柳の本のりしとてさるるのり
のり

其ふかして窓ふとちり練の柳

成美曰初漢三才系云学歎像云空實曰
繩音孕俗小花乃止知あるふ本練の

又都の南神山へ移す故に南宮と改む
平時門の野庭に池を入り此神矣を祀り
その跡を射り池急小依矣路傍首宮と稱す
云々其の神金山彦命と又伴賀命と南
宮山あり同一体と云々を枕隣の本玉之
やうに形なく夢の境を一宮よしてを指皮葺り之
と因玉の垂流る建山ハ美濃小信命カマヤ
其の宮の殿つらうしりの神志ら建

一書み徳老字よ美成院定親傍社の如
夕草はありらふいありふその侍くこと云々

芭蕉翁を我夢屋よまぬ事云々
のらぬをこらふを甘るよ子の香

愚考の撰集抄曰西行上人は口の里を
けりありしよむら河をけりしこと人の

門より互や千らふ内の力を見え入ありよらの
危忘らまののりらるをよひて板一枚をけりて
らしむらりら建ハ志のりあをいんたこと云々
りしらら入被元え何ん月まの建るまこと方
まことありよまると附語りよ人おあてて
夜一袋して連歌しありよとる人共よひの
あらうことのもてけりな建ハおらま志ら建まを
ありし情こ

藤原の志ら

小夜志ら建家の白まひき止ぬ
愚考の撰集曰愁康珠まら建て向秀於文
思田の法を修り久選云愁康博総枝藝
於縁味一特妙際二劣就之平顧二視日新二案
琴而縁之遊特西邊鏡其旧盧于時

日薄雲裏泉寒く氷凍然鄰人有所吹笛者後
聲響寒亮進思曩昔遊宴之好感音而
歎ふの古よりをえりてま未集ふ歌暇法師
ひとり藤をいふを物あらなくせりむ藤
の笛も吹やけりもの此歌の意をえりて藤
の白ときりたる例の棄胎換骨のるる人
故ふ旅歴のあらとけり書あり

神雲ふ隙を教て教けり

愚考の妙なるもの人此るる、雲霞の意をさふ
ををせすものたけり、七連ハ教ををせり
むけりて教りたるをりありて大切のるる
さりし時を佛塔の糸なるあり此の計を
五雜俎曰く至の後漢曰一九二九相違ふ
出るるま、神心の掌此ををせり

此云似ををせはあらまはりてさみだる

神雲の見えるやそののたけり

愚考のたける牛のりも犬もさうらうらうと
とせりてそのたけりまををせりて
牛を運せりまをりとりまをりてその事とい
つゝのたけり

そのの夜飯なるもの

杖のまのの雲腫るり夜の勢

無味堂曰く飯屋寺を京朝ふ有古詩の
孤雀宿老杖 愚考の又江刻甲賀の
天台宗の寺に二百石祖翁の細る
の計敷のたけり、相見山の本城より能
得無ののたけり、住持系入和尚
居合て連中をり

朱の籍や依那之(ま)の雪の跡
栲山曰新古今定家郷弱(ま)て袖うた
ちらふ(ま)け(ま)り(ま)依那のわたりれゆさの
ゆふら(ま)

祿門の草 足袋おろす十夜が
愚考(ま)武用糸略曰草足袋一名類(ま)昔(ま)草
履(ま)を(ま)礼(ま)る(ま)り(ま)素(ま)足(ま)を(ま)え(ま)ら(ま)し(ま)よ(ま)て(ま)草
足袋(ま)を(ま)用(ま)甲

白魚の白き(ま)白(ま)の(ま)や(ま)枚(ま)の(ま)は(ま)し(ま)
愚索白魚(ま)を(ま)江(ま)戸(ま)浦(ま)ま(ま)て(ま)素(ま)足(ま)の(ま)黄(ま)懸(ま)を(ま)ら(ま)
之(ま)乃(ま)を(ま)大(ま)坂(ま)の(ま)人(ま)此(ま)白(ま)れ(ま)を(ま)素(ま)足(ま)の(ま)見(ま)来(ま)返(ま)
庚申(ま)や(ま)ふ(ま)く(ま)ふ(ま)火(ま)燈(ま)の(ま)の(ま)り(ま)を(ま)し(ま)す(ま)

成美曰三體詩(ま)の(ま)年(ま)長(ま)骨(ま)推(ま)甲(ま)子(ま)夜(ま)寒(ま)
初共守(ま)庚(ま)申(ま) 愚考(ま)皇(ま)極(ま)天(ま)皇(ま)の(ま)御(ま)宇(ま)

唐土より渡(ま)るとい(ま)ふ(ま)も(ま)女(ま)帝(ま)の(ま)故(ま)ふ(ま)
初(ま)と(ま)ま(ま)の(ま)天(ま)智(ま)帝(ま)始(ま)て(ま)終(ま)り(ま)ま(ま)り(ま)と(ま)なり(ま)
又(ま)云(ま)文(ま)宝(ま)元(ま)年(ま)大(ま)坂(ま)天(ま)王(ま)寺(ま)ま(ま)て(ま)ほ(ま)り(ま)て(ま)
初(ま)ふ(ま)と(ま)し(ま)り(ま)又(ま)傳(ま)史(ま)略(ま)曰(ま)庚(ま)申(ま)舎(ま)を(ま)結(ま)ぶ(ま)
一(ま)夜(ま)眠(ま)ら(ま)ぬ(ま)三(ま)鼓(ま)を(ま)り(ま)て(ま)上(ま)帝(ま)に(ま)奏(ま)す(ま)り(ま)を(ま)
避(ま)て(ま)罪(ま)を(ま)住(ま)し(ま)算(ま)を(ま)う(ま)ら(ま)し(ま)る(ま)を(ま)け(ま)ら(ま)る(ま)
是(ま)乃(ま)家(ま)の(ま)法(ま)也(ま)

赤(ま)の(ま)書(ま)も(ま)又(ま)ら(ま)り(ま)り(ま)一(ま)回(ま)し(ま)る(ま)
愚考(ま)乃(ま)拳(ま)白(ま)集(ま)を(ま)く(ま)ら(ま)初(ま)入(ま)坂(ま)山(ま)の(ま)ま(ま)ぬ(ま)ら(ま)
又(ま)ら(ま)り(ま)り(ま)一(ま)書(ま)を(ま)集(ま)に(ま)り(ま)此(ま)法(ま)の(ま)立(ま)ま(ま)
を(ま)る(ま)又(ま)滑(ま)り(ま)り(ま)ら(ま)
赤(ま)の(ま)一(ま)よ(ま)を(ま)て(ま)學(ま)ぶ(ま)一(ま)冊(ま)年(ま)の(ま)ら(ま)ま(ま)
愚考(ま)乃(ま)初(ま)一(ま)よ(ま)を(ま)て(ま)を(ま)滑(ま)り(ま)ま(ま)あ(ま)て(ま)ま(ま)ら(ま)

うき世のりりる皆⁺漸しすきして只名
そとぬりり垂て親学よりするとりるを
のふ

才雅口も⁺垂て⁺あ⁺く⁺賞⁺て⁺只白
ふ白く⁺め⁺つ⁺め⁺と⁺あり

血⁺充⁺て⁺心⁺や⁺ま⁺し⁺や⁺と⁺し⁺あ⁺り

愚考⁺舊事本紀曰⁺以⁺手⁺之⁺十⁺箇⁺短⁺爪⁺為⁺手
端⁺之⁺吉⁺棄⁺物⁺以⁺是⁺之⁺十⁺箇⁺短⁺爪⁺為⁺是⁺
之⁺棄⁺物⁺是⁺慎⁺收⁺已⁺爪⁺不⁺一⁺手⁺是⁺之⁺爪⁺
之⁺法⁺之⁺元⁺也⁺云⁺松⁺芥⁺抄⁺曰⁺丑⁺日⁺除⁺手
甲⁺寅⁺日⁺除⁺足⁺甲⁺之⁺去⁺後⁺相⁺記⁺曰⁺爪⁺の⁺長
く⁺る⁺ら⁺ん⁺と⁺ん⁺て⁺目⁺を⁺て⁺の⁺多⁺く⁺入⁺ま⁺ハ⁺く⁺入⁺る⁺子
の⁺目⁺を⁺り⁺爪⁺さ⁺く⁺爪⁺と⁺ま⁺く⁺秋⁺氏⁺要⁺覽⁺曰⁺

爪の⁺長⁺き⁺は⁺破⁺戒⁺の⁺相⁺あり⁺云⁺く⁺文⁺珠⁺同⁺經
曰⁺爪⁺許⁺も⁺一⁺指⁺搔⁺癢⁺故⁺也⁺云⁺く

秋の⁺空⁺庵⁺上⁺の⁺秋⁺ふ⁺は⁺あ⁺ま⁺り

愚考⁺之⁺選⁺秋⁺無⁺絨⁺云⁺天⁺晃⁺朗⁺以⁺弥⁺高⁺兮⁺也⁺
杜⁺牧⁺待⁺小⁺南⁺山⁺与⁺秋⁺色⁺一⁺氣⁺皆⁺兩⁺相⁺有⁺云⁺く⁺夫⁺
秋⁺天⁺の⁺玲⁺瓏⁺と⁺澄⁺の⁺あり⁺て⁺高⁺き⁺も⁺あ⁺ま⁺り⁺夫⁺も⁺
あ⁺ま⁺り⁺故⁺ふ⁺可⁺木⁺ふ⁺す⁺く⁺ま⁺り⁺て⁺高⁺き⁺秋⁺
の⁺山⁺の⁺庵⁺上⁺ふ⁺ま⁺り⁺を⁺ら⁺る⁺ま⁺り⁺て⁺あ⁺ま⁺り⁺の⁺ま⁺り⁺の⁺
て⁺あり⁺と⁺り⁺入⁺養⁺の⁺あり⁺こ⁺ま⁺り⁺の⁺ま⁺り⁺の⁺
て⁺あり⁺と⁺り⁺の⁺ま⁺り⁺

テアリの⁺秋⁺の⁺空⁺庵⁺上⁺の⁺秋⁺ふ⁺は⁺あ⁺ま⁺り⁺
テア⁺あ⁺ま⁺り⁺味⁺増⁺え⁺の⁺や⁺り⁺向⁺川⁺看⁺

陰二十九日在膝脛 三十日在足跣 云々男女
あは日此雨ふ針灸す魚くくく海智くく
る者のためさむ ありまのさ

証味堂曰編々さるとして和漢をさうくさ
愚考わく撰ふんさむと書つては
辨ふわんと書が此時代のゆきとさる編
箋のさるを獲むとさる白ふ必さる

於繩ふ銚のさるさるさるさる
太郎曰銚をさるさる川中ふ竹をさるさる
さるさるさるとめとりさるさるの例ふ細をさるさる
終をさるさると魚の細ふ入を知りさるさる

ゆきさるの梅津桂の花りみ
むりさるの子ありさるのさるさるさる
一書ふ流介梅津 流介の二首の歌あり

紀家本記ふ到るさるさるさるさるさるさる
咲花の梅津の里のあけをの空林さる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる
や花をさるさるさるさるさるさるさる
花のさるさるさるさるさるさるさるさる
てのさるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるとさる 愚考さるさるさるさるさる
ありして難さるさるさるさるさるさるさる
又林季をさるさるさるさるさるさるさる
季をさるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる
又根のさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる

ゆて白紙す一一大切の傳るるまじい先注
の教坊を乳せむの多めをを草紙よのく
必ゆりもふ思ふ一一氏本式なるの時を
おまふを之に正苑の御り布の大切の系
物るり口傳定家おえりてまは花の伝るる
形りりりの浦のときやの林のくまをま
らの歌いりて合点す一一 威美曰大井川
初幸序記ゆをくあそまじい君の代を月
九日とりひてまのふのこまの菊おらう見えぬ
おまむすいしきあふし林をさす一一時を方
らむとして月の桂のまのまの梅はより
みまぬよのまひてま 一書ふおまのま
梅はの里まのりてあまのり今をを紙伸し
てす一一付こ 威美曰宇治拾遺もまを

去依ちふあふりてまのりあふりまのり
まのりのと一一七八年の子のまのり
しげあふりまのりまのりまのり
あとのくわつてまのりまのりまのり
ひて病はくはりのあふりまのりまのり
書付まのりあふりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
小栗よむし行まのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
愚考小栗を唱字紙の物くまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり

以船を造りて海を渡る事

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

細の老道法事船を造りて

日星と云ふ事ありて二十八年

愚考り刻木の事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

一書に云ふ事ありて海を渡る事ありて

と云ふ事ありと細工の法ありて

と云ふ船の事ありて細工の事ありて

と云々の事して三百名の伏見を降定之
土佐日記の傳と云々人古佐日記小曰正月
二十八日よすすり雨やまの次々すすこ云々星
さつえんえんといふるをうらうら してはそそ折紙の家
表ふる会心といふ心あり 折紙不新す

つとまきとく折紙軍計大なり
流氣の習ふ難談もをぬ

一書ふ二十八日の軍を不二の持場ありて我
兄才の夜討の傳ありと云々 愚考夜討
の解いさくの免れあり二十八日の軍とあり
を一向宗の軍と見ての傳込あり次の伏見
又その心を討つて學の表の軍と云々定て
本教寺の軍も大坂と河と云々こゝへは
淡路の傳を三台ふわして歌ぬ教ぬ西上人

と織田勢との合戦ありそまの弁形らに雷
を何らひそるを二十八日の雨を神ひてあ
表と雷といふて附しそする誠ふと云々
の自伝あり流氣の雷ふあらすむと云々の
軍ともうこく一 意門の俳諧をそを
手本ありてくあそ又あやらの巻りよ前々様
さすてて川二十八日花のあふ半盗人と云々
まはらやそ又二十八日を一向宗の山文ふけ
ありあり

海より門あり 五十一 石 瓦

その島の怪鬼もを摺月と花
意味堂日記ありとの傳と云々 愚考
あそくま玉のあそ五十一石瓦を云々
をぬぬ未考後人の教ぬをまら

智のつ子子の縁をといひゆり
ららるるらと米の揚場の切高り

一書小御本の智入つ子子を伝てき鳥を
あましくするりありの取を誓う花の深くをえそ
米の揚場の切高りい志事りきとそ方こそ傳
まらり

愚考智のあり子をせふいり
一終繩の敷きて智の上りりりを志ら
むるの字子あり智を院をめて完上
とすり故よき揚を定めありて米の
揚場とを伝あり

目黒きるありの連のねらみや
一時曰ねらみやとを記しきこと

愚考中り信濃よりと補つみやことあり
写よと焚火脈のきつあり福の字の美記

を初るねらみとらるとはるのさるき文字
らりしとあり

越人々不猫地と接抄力胡ヶけといふ書よ云続せり
兼之元録七年のな伴賀の東林兼房より傳習あり
先師の来々を待て七八の両月の間の密撰るりその
子細を系統表の實をふと事と炭俵集の虚を
ねきるる祖翁一代の法華経より凡夫の目よを
のしりえり

愚評続きありのをめて祖翁
一代の法華経とる舌長一祖公評と密撰の書よ
翁戒後の句しあるをいふ禱若ぬ智入ありあり
身の多る此略上炭俵小月をるるを再入せり
るて書以心好くしてまた又系統みの此實をふと
くとる死りの狂ひの教えあり精子のまらる祖翁一代
の髓脳より花実全く傳り蕉門の龜鑑此一記ふ

とくよの通達をたのむものいふ存文も其角の名目よりて自筆
を揮ひあり炭俵の虚を補ふとら猶し文育の云々
るる俗後をそとて部の名をきつる此炭俵よりとてやりの
虚といふものをきつるいふものありて文続する所の
と歌号をむむものなる所のよの通達する書は松葉をか此の
をあら巻取ふ紙を連てそまといふる書をのあらくするら
むとおつるる所のなるをよて巻取ととらふものなるらむ
するあらも書を修るの法入叶を以八九回の柳を
巻取もをむらうる松葉のる入あきさるるのよと書出
翁の書後入あらするものなる白るる 袖きみの
のるよ俳諧の集片なるる古今ありわるとある
よ眼をて有る

方人いさほ温故知新と
さ神を何ら心も尋ねる
かひちうすくあ
代々のかまの
玉は古真のぬき
するつと十九年

春、社を經つて、應まよふ
 大鏡と早け、因恩、膠、漆、の
 友、よ、ふ、の、め、り、俱、よ、う、の
 少、よ、是、月、院、老、人、の
 本、よ、く、さ、り、し

中敬齋誌

掌中俳諧季寄便覽	全二冊	俳諧發句類聚	全二冊
同名家新題林集	全冊	千題集	全二冊
少系結一づ久	全冊	新五百題	全二冊
和歌俳諧節用集	全二冊	新々五百題	全二冊
俳諧十萬發句集	全冊	饒舌録	全二冊
全七部集大鏡	全七冊	俳諧清風題林發句集	全四冊
全乙二七部集	全冊	俳人百家撰	全二冊

東京書肆

東京市京橋區南傳馬町二丁目
 同 市神田區錦町二丁目
 松山堂書店
 松山堂支店

全ヤ
 70

